

能代高

(10)

夏の日突然に……

日にすすむ文化のしるし 米代の川おときいて……と歌われる能代市民歌。岩手県境に源を持つ豊かな流れ米代川が、能代平野を貫いて日本海に注ぐ。木都能代の繁榮は、米代川の抜きではあり得なかつた。

“能代つ子”と切つても切れないその米代川で、それは起きた。

昭和五年八月二十八日、その日は、モーレッツに暑かつた。暑い日でなければ、あんな騒ぎも起こらなかつたらう。

館岡朝一(3期、永沢外科病院)は、愛用の黒パンツで、泳ぎを満喫していた。五能線の米

代川鉄橋付近が、いつもの水泳場所である。パンツの色は、黒以外に学校で許さなかつた。河口まで行き、日本海へ泳ぎ出すこともたまにあつたが、当時は、鉄橋のあるあたりが、少年たちの一番の水泳場だつた。

午後二時少し前だつた。

詳しくいうと、町寄りから数えて二つ目の鉄橋の橋げた付近に浮かんだ小舟から

「助けて！」

子供の悲鳴のようだつた。そして、かなりの速さで水の中を流されてゆく一人の少年……。

真つ先にこれを目撃したのが館岡だつた。

「大変だ……」

あとは夢中。一瞬のようでもあり、ずいぶん時間がかかつたような気もした。とつさに川へ飛び込んだ館岡は、鮮やかな泳ぎで十数メートル先を流れる少

年に追いつき、見事、少年を助けあげた。近くに、同期の佐藤憲一郎(秋田杉ベニヤ工業社長)が泳ぎに來ていたことも幸いだつた。

二人で力をあわせて、救助した少年を仲仕小屋に運んだ。この小屋は、杉丸太をトロツコに積み込む作業員たちの休憩所。イカダが着く川べりにあつた。

小屋に運ばれた少年は、ぐったりしていたものの、心臓はちゃんと動いており、命に別条なかつた。たき火で暖をとらせる

と、ほどなく元氣を取り戻した。子供ばかり四、五人で小舟に乗つて遊んでいるうち、へさきにいた子供が、竹ザオで舟をこぎ始めた。ともにいた一人が、急に動いた反動で、水中に落ち

た夏の日のハプニング……。

館岡と佐藤は、あたり前のことをしたまでと、かけつけた大

人たちに名も告げず立ち去つた。館岡は、前にも一度こんなよな経験があり、二度目の勇氣ある善行だつた。

新学期が始まつて――。

二人は、すばらしいほうびを手にした。休み中のお手柄が学校に伝わり、全校生徒の前で、知事表彰を傳達されたのだ。

「あとにも先にも、中学時代に受けた表彰はこればかり……」

佐藤は、四年生の時の知事表彰を忘れない。

稗方弘毅知事の時代だつたが、でつかい表彰状とともに金一封がついてきた。中身は二円也。

「人助けつて、まずいいもんだな」

二円もらつたと聞いて、友だちのうらやましがること。

この使い道が、また“味”が



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

あつた。いまの若い人にマネができるだろうか。

館岡は、二円のうち一円を社会福祉事業に寄付。残り一円は貯金した。表彰を受けるような中学生は、やるのがニクイ。

「オレは、なべやぎ食ったら、ねくなつたもな……」

そういう佐藤も、実際は、参考書を買うなど、有効に使ったはずである。

ところで、あの時、館岡らに助けられたのは、現在能代市教委学校教育課長の岩井貫次。

「夕日がたいした赤がっだ」

数え七つだった岩井は、そのことだけが強烈に目に焼きついた。きっと、仲仕小屋で見たたき火の色を夕日と錯覚したのであろう。

時は流れて昭和十九年――。

館岡は、いまの淳城一小の先生。岩井も同じ小学校の先生だ

つた。岩井が出征する当日、館岡は、しみりこういった。

「岩井君、いったん死んだ人だもの、命をそまつにしねでよ。生きのびた命だから、でじ（大事）にせ」

岩井は、えっ？と驚いた。命の恩人が、まさか目の前の館岡だったとは……。

館岡、佐藤、岩井の三人とも健在で、四十五年前の表彰状も大火をくぐり抜けて、館岡が大事に持っている。（敬称略）

